

【3日目/5月24日(つづき)】



「Dr.コト一診療所」からは、比川浜(ひがわはま)がよく見えます。この浜は与那国島の南側にあり、黒潮(正確には「黒潮反流」)にも近いので、軽石が流れ着いている可能性が高いと思っていました。



やはり満潮の汀線に沿って、黒い石が列のように落ちています。表面には白い斑点のような模様が見えます。これは「コケムシ」の一種で、つい最近まで海面を漂流していた証拠の一つです。硫黄島の噴火によって噴出した軽石に間違いありません。



軽石は2列になって大量に落ちていました。左の列は大潮の日の満潮時に、右の列はその後に流れ着いてものでしょう。左の列よりも陸側には草が生えているので、この左のラインが最も潮が満ちた時の汀線ということになります。



かなり大きな軽石もありました。関東の海岸(逗子、鎌倉、茅ヶ崎など)にも硫黄島の軽石は漂着していますが、これほど大きいものはあまりありません。硫黄島の軽石は非常に脆く、漂流中にどんどん小さく砕けていくからです。これは東京に持ち帰りました。私の旅行は、どうも帰りのスーツケースのほうが重くなってしまふことが多いです。



与那国島には内陸を横断する道路もあります。途中に展望台もあるのですが、木が茂っていて、期待していたほどの眺望はありませんでした。

与那国島の魅力は海岸風景です。いわゆる「奇岩」のような名所も何か所もあります。



最初に行ったのは「立神岩 (たつがみいわ)」です。浸食を免れた岩が海上に立っている岩は、全国各地にあります。北海道の「ローソク岩」もその一つです。



立神岩を眺望できる場所は2か所あります。一つは岩の真上の駐車場です。ここから見ると、今にも崩れそうな尖峰に見えます。こうした岩は、いずれ崩れ去る運命にあります。特に堆積岩でできたこの「波蝕尖峰」は、海蝕作用や地震によって、恐らく近い将来、崩れるのでしょうか。海面に見える岩は、立神岩が崩れて落下してものに違いありません。



海岸線を眺めると、ずっと断崖が続いています。火山島ではない与那国島そのものも、地球の歴史で考えれば、近い将来消える運命なのだと思います。



もう一つの展望台から見た立神岩の上部です。凸凹した堆積岩の層理が重なっています。恐らく、出っ張っている部分が「砂岩」、引っ込んでいる部分が「泥岩」でしょう。泥岩のほうがやわらかく、風や波に浸食されやすいからです。このような「波蝕尖峰」でも、こうした互層が観察できるのは、大変興味深いことだと思います。



ここでも1枚描いてみました。手前にはソテツの花が「満開」で、実に南西の島らしい構図です。



次に寄ったのは「軍艦岩」です。長崎の「軍艦島」は人工的な造形、能登の「軍艦岩 (見附島)」は地震で崩れてしまいましたが、この軍艦岩は健在でした。誰が名付けたのか、なるほど軍艦のようでした。